

Title	リカードオの不変の価値尺度論
Sub Title	Ricardo's theory on an invariable measure of value
Author	遊部, 久蔵
Publisher	慶應義塾経済学会
Publication year	1951
Jtitle	三田学会雑誌 (Keio journal of economics). Vol.44, No.8/9 (1951. 9) ,p.465(1)- 491(27)
JaLC DOI	10.14991/001.19510901-0001
Abstract	
Notes	論説
Genre	Journal Article
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00234610-19510901-0001

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.



有斐閣

東京都千代田区神田保町
本郷支店 | 東京大学正門前
京都支店 | 農学部電停前

島津亮二・菱山泉譯

第一巻發賣中

ケネー全集

全六巻 定価三〇〇圓

——フランソワ・ケネーの諸著作の完譯版——

オンケン編纂版「経済表第一版」「経済表第二版」「人間論」「租税論」その他を加えた本邦における初譯。マルクスおよびケインズに影響を与えた天才ケネーの全貌を知り、その偉業を學ばんとする経済學徒にとり必讀の書である。

E・ロール著 阴谷三喜男譯

經濟學說史

上巻 定価四八〇圓

ケネーをはじめマルクス、ケインズ及ヒックス及現代アメリカ經濟學までに累積された經濟思想及び學說を詳述

ロビンソン著

戸田武雄・赤谷良雄譯

マルクス經濟學

B6一五六頁 定価一五〇圓

著者はケインズ學派の俊才。資本論の解明を通じてマルクス經濟學と近代經濟學の交流の上に各派の長短を別抉

永田 清・都留重人監修

所得・雇傭及び公共政策上巻

A5二六六頁 定価三三〇圓

ハンセン教授六十才誕生記念論文集。最近の經濟學書の代表作たるのみならず重要な現實問題の理論的解明の書

送料各册三五圓 振替東京三七〇番

山本万二郎著 哲學講話

價三〇〇圓

鈴木保良著 商業經營

價四三〇圓

小高泰雄著 會計學概論

價二五〇圓

新 小高泰雄著 經營經濟學總論

價四八〇圓

山本 登著 改訂 世界經濟論

價四五〇圓

町田義一郎著 銀行論

價四五〇圓

鈴木諒一著 國民所得の理論と實際

價二二〇圓

森 五郎著 經營勞務管理論

價三五〇圓

白石 孝著 國際貿易の基礎理論

價二五〇圓

白石 孝著 貿易政策要論

價二五〇圓

鈴木諒一著 三訂 經濟統計論

價三五〇圓

國弘員人著 增訂 經營分析

價三八〇圓

國弘員人著 三訂 企業形態論

價三八〇圓

小高泰雄著 改訂 企業經理入門

價二五〇圓

泉文堂

振替東京 13804

東京都千代田区神田

リカードオの不變の價值尺度論

遊部久藏

緒言

一 リカードオの不變の價值尺度論とその批判

二 スミスとリカードオ——この問題をめぐって

三 リカードオ體系の崩壊へ——一般的過剰生産恐慌の否定

リカードオがその『經濟原論』第三版(一八二二年)刊行に際して幾多の改訂をこころみたことはひとの知るところであるが、第一章(價值について)における第六節(不變の價值尺度について *non an invariable measure of value*)もまた第三版においてはじめてあらわれたあたらしい節である。しかしその他の修訂増補に關して語られることの多い割合にこの第六節については比較的、學說史家の詳細の研究を窺問のためかみない。『剩餘價值學說史』においてあれほどリカードオの價值論について詳論したマルクスも第六節に關しては「なんら意義をもたぬ」と軽く一蹴し、のちに貨幣論の修正に關説するときに「このおよそとりえのない箇所」にもどるとのべたものの、再論されては^(註1)ない。また『勞働價值論の歴史と批判』の著者たるホイッテイカーはかの第六節の完全なる理解は彼にとつて不可能であつたと告白して^(註2)いる。まことにリカードオのもともとてやまない「不變の價值標準」は、キヤナンの語をか

リカードオの不變の價值尺度論

(四六五)

りれば「鶴」であつて、一箇のたわいない白日の幻想であるとも云えよう。されば價值論の學問的定立をすでになしとげたマルクスにとつては、第六節におけるリカードオの誤謬の如きはあまりに赤裸々であり、いまさらこれを指摘するのはいささかおもはゆい心地すらしなことであろう。(で特別にこれについて言及することがなかつたのである。)

が、今日我々がかくして「すべては終りぬ。」と結論するならばそれはあまりに安易且つ性急な考え方であるといわねばならぬ。いつものことながらマルクスにとつて問題のきまつたところから、今日の我々の問題がはじまるのである。私見によれば、この一見たわいな馬鹿げた謬點こそ、實は、リカードオとかぎらず、古典的勞働價值説のすべての誤謬の要因の集約的表現であると云つてよい。しかもリカードオの場合においては、そのみにとどまらず、不變の價值尺度論と云うそれ自身さややかな誤謬のうちに我々はリカードオ體系という巨大な堤防の一大決潰をもたらざるをえぬ一石(一石である)を見出しうるのである。その、なぜ、いかにして、且つなによつて、しかるかは以下の行論のおのずから證するところであらう。

(註1) K. Marx: Theorien über den Mehrwert. II. Bd. I. Tl. 1923. SS. 52-3.

(註2) A. C. Whitaker: History and Criticism of the Labor Theory of Value. 1904. p. 89.

(註3) E. Cannan: A Review of Economic Theory. 1929. p. 174.

およそ商品價值論の課題として私は次の如きものをあげようと思ふ。即ち(一)價值の實體 (Substanz)、(二)價值の尺度 (Mass)、(三)價值の形態 (Form) 及び(四)價值の本質 (Wesen) の究明、これである。しかもこれらの課題はその

すれを缺くも他の研究の成就が困難とされるが如き極度の緊密さを以て相倚り合ひつゝ一つの全體を形成している。いま課題のいづちに關して評論しえぬから、要言するにとどめる。一(一)においては商品價值のいわば内容 (Inhalt) あるいは内實 (Gehalt) をあきらかにする。これを勞働として把握するにしてもその性質をあきらかにしなければならぬ。(二)においては(一)の理解を基礎として、價值の測定單位をあきらかにする。これは必然的に勞働時間ということになる。蓋し勞働が價值の實體であるならば、價值量は勞働量によつて規制され、したがつてまたこれによつて測定されるべきはずであるから。(三)においては商品價值の現象形態 (Erscheinungsform) をあきらかにする。しかしこの問題はさしあたり簡單な商品の流通に視野をかざるかぎり、交換價值の問題として提起されるにすぎない。即ち商品の一要因として價值をみとめるにしてもこれを感覺的につかむことは至難である。で、その外在化した側面からつかむということになるが、それは一商品と價值關係をむすんでいる他の商品(の使用價值)のうちこれをみとめるということになる。しかも交換價值の最も具象的なものとしての價格形態が最も簡單な價值形態の必然的展開とし把握されねばならぬのであつて、かくしてまた貨幣の生成過程が本質的にあきらかにされる。換言すれば(四)にいわゆる尺度とはいまだ價值の内在的尺度であるが、價值形態の理解はその外在的尺度に關する理解をもあたえることとなる。これでほぼ價值論の課題が終了したかの如くであるが、實はそうではない。ここで我々はあたかも實存主義者が「自明の超克」をせまられた場合にもつような決意を以つて、經濟學的な自問自答をこころみななければならない。曰く「そもそも價值とはなにか?」これはまさに(一)への逆行であるかの如くである。が、さきには價值の内容を分析してそれが特定性質の勞働であるということをつかめたのであるが、このたびは、この同じ勞働がなぜ價值となるかをあきらかにしなければならぬ。かくしてまた(三)の價值の現象形態によつて蔽われているところのもの

の本来のすがたがあきらかにされるであらう。このような價值論の課題に關する定式をあらかじめ前提して、アダム・スミス及びリカードオによつて代表される古典學派の價值論について立入つて考察すると、こゝに我々は次の如き事實を見出す。即ち古典的價值論の缺陷はまず、(一)及び(四)の課題を全く等閑に附していることである。更に(一)及び(二)の課題についてもこれを充分成功的に遂行しているとは云えず、嚴格に評價すればいずれも失敗しているといふほかはないであらう。しかもさきにも述べた如く四つの課題の相互依倚の觀點よりみると、彼等の研究における(一)及び(二)の不充分さと(三)及び(四)の缺如とが相互に因となり果となつているのを我々は見出すのである。いまこの點を詳論する餘裕をもたぬが、小稿はかかる全缺陷の集中的表現點をリカードオの不變の價值尺度論のうちにもとめ、この問題を論ずることによつてわずかにリカードオ論理の全體的性格を垣間見しようとするものである。しかもこれがひとりリカードオにおける問題であるのみならず古典經濟學にとつての共通の問題でもあることは、リカードオの謬見がスミスに由來していることに我々はこれをしりうるであらう。

我々は我々の批判をリカードオよりはじめるとしよう。

前述の如く商品價值の實體が労働であるならば、商品價值の大きさは労働量、詳言すればその度量單位たる労働時間によつて規制されるべきことは理の當然である。このことはリカードオによつても認識されている。彼は労働が「すべての物の交換價值の根柢 (foundation)」であるといふことが「經濟學における最も重要な學說」であるといふべから、曰く「もし諸商品に實現せられた労働量によつてそれらの交換價值が規制されるとすれば、労働量の各増加はその加えられる商品の價值を増大せしめ、同様に労働量の各減少はその商品の價值を減少せしめなければならぬ。」^(註4)

しかしもともと價值の大きさを規制する労働量は價值の尺度として商品に固有の内在的なものである。したがつてここに外在的尺度がもたらねばならない。即ち商品價值の大きさを人の目にそれとわかるように外的に表示する尺度が必要とされる。もつともリカードオにおいては價值の内在的尺度と外在的尺度とについての明確なる區別は存しないが、——それというのも、彼が價值と交換價值とを明確に區別しえないからである。^(註5)——事實上兩者が論ぜられてゐる。外在的尺度は商品價值の他商品の一定數量による表示であるが、それは貨幣經濟においては當然貨幣である。このこともまたリカードオによつてつとにその『經濟的にして且つ安定せる通貨のための諸提案』において次の如くのべられてゐる。

曰く「一商品の價格は貨幣のみで示めされたその交換價值である。」

一商品の價值はそれと交換される^(註7)。他の商品一般の數量によつて測定される」

したがつてリカードオは價值の内在的尺度である労働時間がなげいかにして價值の外在的尺度に轉化し生成するかをあきらかにすべきである。かくしてまた貨幣の本質(價值の尺度としての)があきらかにされるであらう。彼の經濟學の重要課題が晩年において一層價值尺度の問題に向けられた點^(註8)よりしてもそれは必要なことであつた。しかるにリカードオの思考のすすめ方は異常であつた。彼はそれ自身不變の價值を有するものでなくしては價值の尺度たりえないと考へる。しかもかかる不變の價值を有するものは存しない。したがつてまたかかる尺度なるものは存しないといふこととなる。この推論はみぎの『諸提案』より『原論』(諸版)にいたるまで一貫している。

『諸提案』に曰く「價格の變動ほどたしかめるのに容易なものはない、價值の變動ほどたしかめるのに困難なものはない、全く、不變の價值尺度 (an invariable measure of value) なくしては、いくらかの確實さあるものは精確さ

を以て價値の變動をたしかめることは不可能であるが、かかるものは存しない。^(註6)

『原論』第一章第六節に曰く「諸商品が相對價値において變化した場合に、眞實價値においていずれの商品が下落しまたいずれの商品が騰貴したかをたしかめる手段をもつことがのぞましいであろう、そしてこのことは、これらの物を順次に、ある不變の價値標準尺度 (some invariable standard measure of value) —— それ自體、他の諸商品が蒙るような變動をならんら受くべきではないところの、—— と比較することによつてのみ、なしとげられるであろう。かかる尺度はこれをもつことが不可能である、何故ならば、商品にして、それ自體、その價値がたしかめらるべき諸物と同じ變化を蒙らないものは、全くないからである、即ち、その生産により多しまたはより少い労働を要求するに至ることのないものは、全くないからである。^(註10)」

もつともリカードが不變の價値尺度が存しないという場合、單に價値の不變なものが存しないというだけでなく、同時に自然價格 (生産價格) の不變なものが存しないともみられていることは、右の引用箇所引續く文章においてあきらかである。即ち彼は、貨幣 (金) を生産するに必要な労働量が不變であるにしてもその生産に必要な固定資本の比率や耐久力が他の諸商品におけるそれと異なるから貨銀の變動によつてその價値 (實は自然價格) が相異なる影響を蒙るとみている。また彼は貨幣を生産して市場にもたらすに必要な時間が他の諸商品のそれと相異なる點にいかなるものにも價値尺度たる性格を賦與しえない理由を見出してゐる。^(註11)

だが一體、外在的尺度たるものは、不變の價値を有することが必要であろうか？ すこしも必要ではない。もちろん不變の價値を有するものが尺度となればこれほど便利なことではないであろう。しかし價値も尺度たるものがそれ自體價値を有しなければならぬということがこのことを絶對的に不可能とするであろう。蓋し價値量は労働の生産力

の變動によつてたえず變動せざるをえないであろうからである。貨幣の價値がたえず變動するということは、たしかに價値の尺度としていささか不便でないこともない。^(註12) しかし、これはいわば商品Ⅱ貨幣經濟の宿命であると云わねば

ならない。けれども貨幣 (金) の價値變動があるにしてもそれはすべての商品の價値表現に對して同時に且つ一樣に影響するであらうから、一定時點ごとに、商品價値の貨幣的表現たる價格によつて諸商品の價値の相對的高さを知ることができるのである。「それゆゑに諸商品の相對價値は貨幣の價値が不變のままである場合と同様に正當に貨幣において表現される。かくして『不變の價値尺度』を發見するという問題は片付けられた。^(註13)」ただ相異なる時點における商品價値 (同一商品の) の比較においては、貨幣價値の變化が當然考慮されねばならない。^(註14) けれども經濟學上とくに

關心の對象となるのが相異なる時點における比較的價値ではなくして同一時點におけるそれであることはいうまでもない。^(註15)

いずれにせよリカードが外在的價値尺度として不變の價値を有するものをもとめたのは全く見當ちがいと云わねばならないが、それというのも彼が商品價値の實體を形成する労働の性質について全く無關心なるがためである。彼は前述の如く労働量が價値の (内在的) 尺度であることは充分みとめていたのであるが價値の量的分析にすつかり眼をうばわれてしまつた結果、労働がいかなる形態において價値となるかの研究を怠つたのである。即ち價値の外在的尺度はかかる特殊な性質の労働の外在化 (疎外) したものであるから、後者の理解の缺如は必然的に前者の理解を困難とするであらう。

しからば價値の實體としての労働はいかなる性質のものであろうか？ またかかる事柄の理解がなにゆゑに價値の外在的尺度の理解を可能とするかをみるとしよう。價値の實體としての労働は決してミスヤリカードが考えるよ

うに現實にあるがままの労働ではない。なぜなら相異つた商品のうちに實現されている労働は當然その性質を異にしており、したがつてかくの如き異質的労働間の量的比較とか測定の如きは行いようがないからである。即ち價値の實體としての労働は抽象的・人間的労働として等質的なものであらねばならない。人間の脳髓、筋肉、手、神經等々の單なる生産的支出として考えられるような労働であらねばならない。その量的差異(労働時間)だけが問題となるような労働であらねばならない。かかる労働こそ價値の實體たるべきである。即ち商品のうちに體現されている労働は使用價値に關聯しては具體的・有用的労働であり、價値に關聯しては抽象的・人間的労働である。スミスもリカードもこのような労働の二重性格を自覺しえなかつた。もつとも彼等は事實上この區別を行つてゐるとは云えよう。というのは彼等もまた労働を、時には量的に、時には質的に考察してゐるからである。「だが、古典經濟學が氣付なかつたことは、諸労働の單に量的な區別は、それらの質的な統一あるいは同等性を、かくして抽象的・人間的労働へのそれらの還元を、前提するということである。」^(註10)かくして彼等によつては商品價値の量的規定がなげにゆえに労働量を基礎として可能であるかが嚴格な意味で理解されたとはいえず、かくしてまた商品と商品(あるいは貨幣)との價値關係が本來なゆえに可能とされるかの論理を缺くのであるが、もともと商品間の價値關係はかくの如き價値(抽象的・人間的労働)としての諸商品間の同等性關係にほかならないのである。すでに老バロンによつて看破された如く、價値の相等しい諸商品間にはなんらの相異も區別も存しないのである。かくして使用價値としては諸商品は相異なる質であるが、價値としてはそれらは相異なる量たりうるのみである。ここにはじめて全く使用價値を異にする諸商品の間に價値としての一定の比例關係が成立しうるのである。かかる價値關係についてその最も單純な形態を考察すれば、それは一商品と他の一商品との關係である。それは $zMA = yNB$ なる方程式によつて示めされるであらう。

(商品Aのx量は商品Bのy量に値する。)この場合、商品Bは商品Aの價値(の)形態たるものであり、xに對するyという比例において商品Aの價値を自らの使用價値によつて表示するのであり、さればとりもなおさず、商品Aの價値尺度たるものである。しかしかく商品Bが商品Aの價値尺度たりうるのは、商品Aも商品Bもともに使用價値としては相異なる反面、價値としては同等な、したがつて相互に較量されうるものであるからである。いわば商品Aも商品Bもそれ自身價値の内在的尺度たる抽象的・人間的労働量をそれぞれ幾何か持つ有しているからこそ、商品Bが商品Aの外在的價値尺度たりうるのである。かくの如き一定の價値關係を基礎にしてはじめて商品Aと商品Bとの間に一定の交換關係が成立しうる。即ち商品Aのx量が商品Bのy量と交換される。かくしてまた商品A及びBの價値のなかにふくまれていた労働が單に抽象的・人間的労働たることなく、かかる労働の形態を基礎にして交換が行われることによつてその獨自の社會的性格を現實化する。(價値關係においてすでに私的労働の社會的性格が現象するが、それはいまだ「理論的な過程」であつて、「現實的な過程」ではない。)商品經濟においては社會的總労働の社會的諸欲望への配分、人間生活の永遠的自然條件は、交換を通して實現されるが、かくしてまた人間關係の物象化が成立する。全過程の基礎たるものは抽象的・人間的労働の定立である。ここに價値の本質が存する。商品經濟の發展は必然的に貨幣の出現をもたらし、商品Aの價値の貨幣形態は要するに商品Bのかわりとして貨幣商品金(又は銀)があらわれたにとどまる。その意味で簡單な價値形態は貨幣形態それ自身の萌芽であると云える。(もちろん兩形態の間に中間の環が必要とされるが……)金(又は銀)がさしあたり貨幣となるのは、商品價値の「一般的尺度」という機能によるものである。けれども「諸商品は、貨幣によつて、較量されうるものとなるのではない。その逆である。すべての商品は、諸價値としては、對象化された人間的労働であり、したがつて絶對的に較量されうるものであるが故に、すべての商品が、そ

これらの價值を同じ獨自の商品で共同的に度量し、且つかくして、この商品をそれらの諸商品の共同的な價值尺度あるいは貨幣に轉形することができるのである。價值尺度としての貨幣は、諸商品の内在的な價值尺度たる労働時間の、必然的な現象形態である。^(註17)

價值の實體、尺度、形態及び本質の内面的聯關の概要はみぎにみた如くであるが、從來の貨幣學說のいくたの誤謬はこれを理解しえない點に由來すると云える。貨幣を以て直接に労働時間そのものを代表せしめようとする「労働貨幣」の幻想(代表者、ジョン・グレイ)の如きはその典型であるが、リカードの不變の價值尺度論もその顯著なものである。蓋し彼にしてもしも價值の實體たる労働の性質をたしかめかくして價值の外在的尺度たる商品及び貨幣が價值の内在的尺度たる労働時間の必然的な現象形態であることを理解したならば、それが可變的な價值を有しても差支えない、あるいはむしろ可變的な價值を有しなければならぬということをみとめえたであらうからである。「されば『不變の價值尺度』をもとめんとする問題は、事實上、價值の性質自體という概念の探求に代わる誤れる表現であつた。』^(註18)「リカードは、労働の數量が『不變の價值尺度』という誤れるまた誤解された問題の解答たるべきこと、あたかも穀物、貨幣、賃銀等々が以前にかかるものとして考察され定立されたと同じ具合であるといつたような様子をしればよそおつており、また事實多くの場合そう論じている。この虚偽の假象がリカードにあらわれているのは、彼にとつての決定的課題が價值量の規定であるからである。それゆゑに彼は労働がよつて以て價值の要素であるところの特殊の形態を理解しなかつた、とくに個々の労働が抽象的・一般的なるものとして且つこの形態において社會的なるものとして現われざるをえないことを理解しなかつた。したがつて彼は、貨幣の形成と、價值の本質及び労働時間によるこの價值の規定との關係を理解しなかつた。』^(註19)

(註4) D. Ricardo: Principles of Political Economy and Taxation. ed. by E. C. K. Gornier. 1927. p. 8. 堀經夫氏譯、一〇頁。なお p. 65. 譯、七九頁。

なおリカードの價值論が價值原因論であるかあるいは價值尺度論であるかに關する學說史家の論争(論争の内容については、森耕二郎氏著『リカード價值論の研究』、第一篇第六章参照。)はあまり意義を有しなく。いつたい價值の原因、たたくは價值の實體の理解なくして價值の尺度の説明が成立しうるであらうか? ただリカードにおいては實體の觀念及びそれと尺度との關係が明確でなく、ために理論上の混亂がうかがえるのである。それというのも彼の價值論が交換過程における量的規制にあまりに目をうばわれた結果である。

(註5) リカードがデステット・ド・トラシーの一文を引用して賛意を表明して次の如くのべた際に、彼は價值の内在的尺度と外在的尺度との區別と聯關とを明かにすべき絶好の機會にめぐまれたのであつたが、彼はこれをついに逸した。曰く「フラン貨幣及び測定さるべき物が雙方に共通なる他の尺度に還元されえないかぎり、一フラン貨幣は何物に對しても價值の尺度ではなくて、ただそれでフラン貨幣がつくられている同一金屬の一分量に對する尺度であるにすぎない。これらは共通なる他の尺度に還元されうる、と私は思う、蓋し、これらはともに労働の結果であるからである、それ故に、労働は、それによつてこれらの物の眞實價值ならびにその相對價值が測定されうべき、一つの共通尺度である。』(Principles. pp. 268-9. 譯、三二一頁、なお後出(註10) 掲出のマカロック宛書翰参照。

(註6) リカードはスミスより一層、價值と交換價值との區別を認識していた。『原論』第二〇章の所論(とくに兩者を混同するセエの批判)はあきらかにこれを示す。なおここにトラウアー宛書翰一八二一年七月四日附を引くとしてしよう。曰く「私は一商品に費された労働がその交換價值(exchangeable value)の尺度であるとは云わないで、その積極的價值(positive value)の尺度であるとするのです。それから私は交換價值は積極的價值によつて規制され、したがつて費された労働の量によつて規制されるということに付け加えます。』(Letters of D. Ricardo to H. Trower and others. 1811-23. ed. by Bonar and

Hollander. 1899. p. 151. など同年一〇月四日附書翰 (p. 162) をみられたい。) さればリカードオにとつて明白でなかつたのは、價值と交換價值との區別というよりはむしろ兩者の聯關であると云えよう。これは要するに彼における價值形態論の缺如ということに外ならない。ここにリカードオをも含めての古典經濟學の深くその方法に根ざした一缺陷が見出せる。古典經濟學の根本的缺陷の一つは、それが商品の・および殊に商品價值の・分析からして、價值をまさに交換價值たらしめるところの價值の形態を見つけ出すことに成功しなかつたということである。A・スミスやリカードオの如きその最もすぐれた代表者たちにおいても、古典經濟學は、價值形態をば、まづたゞどうでもよいもの・あるいは商品そのものの本性にとつては外的なもの・として取扱つてゐる。その理由は、古典經濟學は價值の大きさの分析に注意をすつかり奪われてゐるということだけではない。それはもつと深いところに根ざしてゐる。勞働生産物の價值形態は、ブルジョア的な生産様式の最も抽象的な・しかしまた最も一般的な・形態であつて、かの生産様式は、これにより、社會的・生産の特殊な一種類として性格づけられ、したがつてまた同時に、歴史的に性格づけられるのである。だから、もしひとが、それを社會的・生産の永遠的な自然形態だと見誤るならば、ひととは必然的に、價值形態の、かくして商品形態の、さらに進んでは貨幣形態・資本形態・等々の、獨自性を看過するものである。』(K. Marx; Das Kapital. Volksausgabe besorgt von M.-E.-L. Institut. I. Bd. SS. 36-7. 長谷部文雄氏譯、二二一頁。)

(註7) D. Ricardo; Proposals for an Economic and Secure Currency. 1816. Economic Essays. ed. by Gonner. 1923. p. 162.

(註8) ホランダーは『原論』第三版における價值論の變更について曰く「リカードオの至上且つ第一の目的はもはや、高貨銀が高物價の原因であるという命題を論破することではなくして、投下勞働が價值の最も實際的な尺度であり、金がその最も便利な標準的表現であるということを示すであつた。」(J. H. Hollander; David Ricardo. 1910. p. 109.)

(註9) Economic Essays. p. 163.

(註10) Principles. p. 36. 譯、四二頁。『原論』における不變の價值尺度觀はもろもろの一文につきるものではない。Gonner

Ed. pp. 21-2. 33. 及び次節論及のスミス批判の箇所、参照。更に第一、二版にあつて第三版にない文章としてゴナーによつてとくに掲出されてゐる一文もみよ。(pp. 11-2.) など晩年の書翰中に不變の價值尺度に關する同趣旨の文章がみられるが、ここでは一八二三年八月三日附及び同年八月二五日附マルサス宛と同年八月二二日附マカロツク宛書翰の参照をもとめたい。とくにマカロツク宛書翰中に次の如くのべるとき、彼は(註5)引用の場合と同じく價值の内在的尺度と外在的尺度との聯關に問題意識をいだくべき絶好の機會にめぐまれたのであるが、彼はこれを怠つてしまつた。曰く「私は、諸商品の交換價值を規定する諸事情とその價值の媒介物を規定する諸事情との間にあなたの仰言るような大きな相異をみとめません。價值を測定すべきであるとするれば、價值を有するなんらかの商品の媒介によつてそれを測定しなければならぬと、あなたの云われるのには私は同意します。……してみれば、我々が諸商品の價值を規定する諸事情に關する知識をもちさえすれば、不變の價值尺度をうるには何が必要かをのべうる」ということはあきらかではなうでしょうか?」(Letters of D. Ricardo to J. R. McCulloch. 1816-23. ed. by J. H. Hollander. 1895. p. 174.)

(註11) かく價值の(外在的)尺度について價值の不變と自然價格の不變とを同一平面上においてのべてゐる點に、我々はリカードオにおける價值と生産價格との同一視の一例證を見出す。この點及び、價值の内・外在的尺度の明確な區別の缺如の點より推して、我々は不變の價值尺度探索のころみの挫折による絶望のうちに、勞働價值説そのものへのリカードオのふかまりゆく懷疑と苦惱との投影を見出しうる。

(註12) このことは價值の變化と價格——もちろん價值の單なる貨幣的表現としての價格——の變化とが必ずしも一致しないといふことがこれを示すであらう。リカードオはこの事實をみとめてゐる。曰く「穀物の價值について語るとき、私はその價格とはむしろ異つたあるものを意味する。穀物の價值が騰貴するとき、その價格も一般に騰貴する、そしてもしも價格が一樣に測定されるところの貨幣の價值が不變であるならば、常にそうなるであらう。しかし穀物がすべての他のものと比較して變化しない、即ちそれがより多くあるいはより少い勞働の結果ではないにしても、その價格は騰落しうる、蓋し貨幣がより豊富且つ低廉と

なり、またより稀少にして高價となりうるからざる。」(Essay on the Influence of a low Price of Corn on the Profits of
Stock. 1815. Economic Essays. p. 282.) などトリスノー宛一八一八年九月一八日附書翰参照。ここに彼の理論的分析におけ
る貨幣価値の不変の假定が由来たる Principles. p. 38, 64, 260. など Charles Turgeon et Charles—Henri Turgeon;
La Valeur d'après les Economistes anglais et français. 1921. pp. 81-2.

(註27) Theorien. III. Bd. 1923. S. 157. 「金の價值變動は、また價值尺度としての金の機能を妨げるものでもない。それは、
すべての商品に同時に影響し、かくして、他の事情にして同一ならば、すべての商品の相互的な相対的諸價值を、——それらは
今やすべて、以前に較べてより高し・あるいはより低し・諸々の金價格で表現されるが、——不変のままおおく。」(Kapital.
I. Bd. S. 104. 譯、三〇九頁。)金は不變の價值を有する必要があるばかりか、むしろ「價值尺度として役立ちうるためには、
金は、その可能性からすれば(der Möglichkeit)可變的な價值でなければならぬ」(Zur Kritik der politischen Ökonomie.
Volksausgabe besorgt vom M.-F.-L. Institut. 1934, S. 54. 宮川實氏譯、七七頁。)

(註14) リカードオの不變の價值尺度の前提が多分に相異なる時期における價值の比較という要請に由来することは想察されること
らであつて、彼はかなりこれに關心をいだいていたようである。例えば第一章第二節において労働の異質性の問題について論じ
た際に、相異した時期における同一商品の價值の比較の問題に論及している。(p. 16.) また第三節後段においてのべるところ
をみれば(pp. 21-3)「不變の價值尺度設定の動機は一商品の相對價值が變動した場合にその變動がその絕對價值の變動に由来
するものなるかいなかを認識する必要にせまられたものであることを示しており、これは要するに同一商品の相異なる時期にお
ける價值比較上、不變の價值尺度が設定されたことを示すと云えよう。なおここに測定される物の價值また測定する物の價值と
云われるものが絕對價值であつて相對價值でないことは云うまでもないが、しかるにリープクネヒトはリカードオの立場が一
應、相對價值論であるという観点よりして、不變の價值尺度論におけるかかる絕對價值の想定を矛盾とみなしている。(W.
Liebknecht; Zur Geschichte der Werttheorie in England. 1902. S. 30. 34-5. など S. 92. 參照。)」(リカードオ

には絕對價值の觀念——それについてリカードオ自身は明確に説明せず、またそれを取りあげぬと明言しているにもかかわらず、
があきらかに存在しているのであるから、この矛盾の指摘は意味がないであらう。

(註15) 「そもそもこの歴史上の時期の商品の價值を比較するとう興味は、事實上、本来の經濟學的興味 (ökonomisches Inter-
esse an und für sich) ではなくして、衡量的興味である。」(Theorien. III. Bd. S. 158.) カツトマン・ヴェンナーの「
本批判」の語を註して。(S. Bailey; A Critical Dissertation on the Nature, Measures, and Causes of Value.
1825. Ch. V. and pp. 110-1. などヴェンナーの「リカードオ批判及びリカードオ學派の反論」註して、K. Diel; Sozialwissen-
schaftliche Erläuterungen zu D. Ricardos Grundgesetzen der Volkswirtschaft und Besteuerung. 1921. I. Tl. SS.
26-31. 參照。)不變の價值尺度論をめぐる「インリー」を註して、マルサスとリカードオとの關係の詳論は他の機會をゆづる。マルサス
の「リカードオ」を註して、次を參照。F. R. Malthus; The Principles of Political Economy. 2. Ed. 1836. Ch. II. Sec.
VI. Definitions in Political Economy. 1827. Ch. IX. The Measure of Value. 1823. pp. 32-52. などトリスノーの
「資本」の三編の「貨幣的諸概念」註して、Whitaker; lb. pp. 88-92. 參照。
(註19) Das Kapital. I. Bd. S. 86. 註、二六頁。
(註17) lb. S. 99. 註、二六頁—三〇頁。
(註18) Theorien. III. Bd. S. 159.
(註16) lb. S. 163. 註、lb. II. Bd. I. Tl. SS. 1-2. 參照。

11

價值の尺度たりうるものは不變の價值をもたねばならぬという思想がいつころから發生したかに關してはいまだ明
リカードオの不變の價值尺度論

隙でないが、我々はすでにウィリアム・ペティの「アイルランドの政治的解剖」にこの種の見解を見出すことができ(註2)る。しかし不變の價值尺度論の展開はアダム・スミスによつてはじめて經濟學說上の重要地位をあたえられたかのようである。即ち彼は『國富論』第一篇第五章においてこれを唱えている。彼とリカードとの異なる點は、スミスはかかる觀點より出發して不變の價值尺度として勞働(及びより相對的な意義においては銀と穀物)を見出しえたのにリカードは竟にこれを見出しえなかつた點にあると云えよう。したがつてリカードは自己の立場よりして、スミスの掲げた不變の價值尺度がいかに可變の價值を有するかを指摘して、スミスを批判している。『經濟原論』第一章第一節の主要部分はこれを論じていると云えよう。もつともその批判はスミスの支配勞働價值説に對する批判の一部分をなすものであつて、いまここに詳言しえない。ただここではリカードの支配勞働價值説に對する批判が一般にそれ自身としては正しいものであるにもかかわらず、問題の所在をかなり見落していると同じく、不變の價值尺度論においてもいささかスミスの見解を性急に批判し去つた觀のあることを指摘するにとどめたい。まづ我々はスミスの見解を辿つてゆきたい。

「例えば人間の足とか、一尋^{びん}とか、一握りとか云うようにそれ自身つねに變化する量の尺度は、——とスミスはいふ。——他の量を正確に度りえない、それと同様に、それ自身の價值が絶えず變化するところの商品もまた、他の商品の價值の正確な尺度となることは到底出來ない。」^(註21)だがかかるアナロジーはいささか問題とされるであらう。但しアナロジーそのものが問題であるというよりは、これによつてスミスの意圖した點に問題があると云えよう。即ちスミスはむしろこのアナロジーによつて測定されるものと測定するものとの間に共通物が存しなければ總じて尺度が存しえないということを推論すべきであつた。かくしてまた價值の實體としての勞働の性質が見究められえたであらう。

う。しかるにスミスは測定における物理的操作にすつかり目をうばわれて物差しの如き不變量のもの提起しているのである。そのような意味でスミスは勞働のみに不變の價值を有する物を見出す。なおここで一言するに、スミスにおいてはリカードにおけると同じく價值の内在的尺度と外在的尺度との明確な區別が存せず——彼もまた交換の量的規制にとらわれて價值と交換價值とを區別していないから——、したがつて前者から後者への移行の論理を缺いてゐる。(『國富論』第一篇第四章における彼の粗朴幼稚な貨幣成立觀をよみ、しかるのち『資本論』第一卷第一章第三節及び第二章における精緻深刻な貨幣生成觀と對比せよ。)でここに價值尺度論とかざらず價值論全體におけるスミスの見解は極めて曖昧模糊たらざるをえない。

スミスが價值の尺度として投下勞働量と支配勞働量とをあげていることは周知にぞくするが、しかしここに投下勞働と云われ支配勞働と云われるものの觀念は必ずしも明白ではない。即ち投下勞働は必ずしも人間の勞働力の機能の發揮として客觀的なものとして考えられているのではなくして、ときとして、これは「勞役と苦心^{トイラント、トイラント}」とよばれている如くかなり主觀化されて考えられてもいる。(もちろんスミスの偉大さは自らマニュファクチャ時代^{マンユファクチャー時代}の經濟學者でありながら、その限界をつきやぶつて機械制大工業の段階を透視し、それへと傾斜した視角において勞働を客觀的にとらえた點にある。)また支配勞働は彼における生きた勞働と對象化された勞働との區別の結果として、ときとしては勞働そのものをも意味している。この點を詳言すれば、投下勞働を一面においては主觀的にとらえていることは次の一文にあきらかである。曰く「すべての物の眞實價格、即ちすべての物がそれを獲んとする人をして眞實に支拂わしめるところのものは、それを得るための勞役と苦心とである。すべての物は、それを獲てそれを賣却し、またはそれを他の物と交換しようとする人にとつて、眞實にどれだけの價があるかと云えば、それはそれによつて彼が自ら省くことができる勞役と

苦心であり、またそれが他人に課することができず、勞役と苦心である。貨幣または貨物を以て物を買ふとき、それは勞働をもつて買ふのであつて、それは恰も我々が物を獲得するのは自己の肉體の勞役によるのと同じことである。右の貨幣または右の貨物は、實に我々にこの勞役を省いてくれる。それには一定量の勞働の價值が含まれているので、我々は、この時、同量の價值を含むと考へられる物と交換するのである。^(註22)「ここには勞働の主觀的理解があるほか、「勞働の價值」という觀念があらわれている。「勞役と苦心」としての勞働は「勞働の價值」と同義語であるかのようにもとれるが、むしろ「勞役と苦心」として考へられた勞働が勞働者にとつて有する意義 (Bedeutung, significance) として解すべきであらう。^(註23) (スミス價值論の詳論は別稿に期す。) スミスはかかる意味での勞働の價值の不變であることを次のように説明している。「勞働の相等しき量はいつ如何なるところにおいても勞働者にとつては相等しき價值をもつと云つていいであらう。健康と體力と精神とが普通の状態であり、熟練と技巧の程度もまた普通であるならば、彼はつねに同一量の安樂と自由と幸福とを犠牲とせざるをえない。^(註24)」もちろんこの提言自體は頗る大雑把なものであるが、ここでスミスが相異なる人間に關しては平均人を假定し、また相異なる種類の勞働——とくに複雑勞働と簡單勞働——に關しては彼なりにその還元を一應考慮していたことはいうまでもない。したがつてこの提言自身についてかれ^(註25)れ批判するのは殆ど無意味と云つてよく、むしろここでスミスのせめらるべきは勞働の等質化という客觀的過程を人間の行ふ主觀的平等視と誤解している點にあると云えよう。^(註26)

スミスは更にすすんで勞働とひきかえに得られる物の量がいかにほど變化しようとも勞働の價值は依然として不變であると云う。曰く「彼が支拂う價格〔勞働の價值——^(註27) 邊部註〕は、彼がその報酬として受取るところの貨物の量如何にかかわらず、つねに同一でなければならぬ。その勞働を以て購ひうる商品は、實際、ある時はより多くある時

はより少ないであらうが、變化するのはそれら商品の價值であつてそれを購入する勞働の價值ではないのである。…それ故に、ただ勞働のみはそれ自身の價值において不變であつて、そのみはあらゆる商品の價值があらゆる時代あらゆる場所において、測定され、比較されるところの究極の、そして眞實の標準である。^(註27)」たしかに、ここまではスミスの意義においては勞働の價值の觀念に大して破綻がない。しかしスミスの勞働の價值の觀念はこれにとどまるものではない。彼は「勞働の價值」の語によつて勞働の眞實價格——^(註28)「勞働と交換にあたえられるところの生活必需品及び便益品の量」——を意味している場合もあるのである。そしてこの點に後述のリカードオのスミス批判がうまれてくる。がしかしスミスは勞働の價值にかかる兩義を明確に區別していない。右引用文につづく次の一文にいわゆる「勞働の價值」とはいずれを意味するものであらうか？

曰く「同一の勞働量は勞働者にとつてはつねに同一の價值をもつものであるが、彼等を雇う人にとつては、時により大小いろいろの價值をもつかに思われる。彼はこの同一の勞働量を買うのに、ある時は多量の貨物をもつてし、ある時は少量をもつてするので、彼にとつては勞働の價格はあらゆる他の物のそれと同様に變化するように見えるのである。即ちそれは前の場合には高價であり後の場合には安價だと見えるのである。がしかし、實際においては前の場合においては貨物が安く後の場合においては貨物が高いのである。^(註28)」

ここではあきらかに勞働の眞實價格 (實質賃銀) が問題とされている。したがつてかりに勞働者の生活手段の價值に變化がおきて勞働の眞實價格にして變化するならば、これは當然、客觀的意味での勞働の價值の變化と云わねばならない。この場合商品の價值のみ變化したとは云えない。しからばみぎの文章で不變と目されているのはやはり勞働の主觀的價值ではなからうか？ 即ちスミスは他の多くの場合におけると同様、ここでも勞働日を変としてあつか

つてあり、したがつて、その労働者にとつての意義——労働の（主観的）価値——を不変とみなすことによつて、賃銀がいかに變化しようとも労働の価値は不変であると主張するにいたつたのである。^(註29)なおスミスは一定量の労働は長期においては一定量の生活資料たる穀物を支配し（ここに労働の客観的価値の不変性が考えられている）、したがつて後者によつて最も正確に購われるということから、逆に、穀物の価値の不変性を類推し、銀が年々の如き比較的短期についてよりよい価値尺度であるのに對して穀物の比較的長期についてよりよい価値尺度たることを主張する。リカードオのスミス批判中注目すべきものは（金）銀や穀物に關する部分ではない。蓋しスミス自身これらのものの価値の不變性が極めて相対的でないことはこれを充分とめているからである。で労働の価値の不變性に注目することとなるが、彼はこれを單純に實質賃銀（生活手段の価値）の不變性として解して批判する。曰く「労働の価値も等しく可變的であつて、他のすべての物と同じく、社會状態のあらゆる變化とともに一樣に變化するところの、供給と需要との間の比例によつて、影響されるのみならず、また労働の賃銀が支出される食物及びその他の必要品の価格の變動によつても、影響されているのではないか。」^(註30)

更にリカードオはこれを布衍して云う。「もしも労働者の靴や衣服が、機械の進歩によつて、現にその生産に必要な労働の四分の一で生産されうるようになるならば、それらのものは、恐らく七五%下落するであろう、しかし、労働者が、そのために、永續的に一着または一足の代りに四着の上衣または四足の靴を消費することができるようになるであろう、ということは決して眞實ではないから、競争の結果と人口に對する刺戟とによつて、彼の賃銀は、恐らく、違からざるうちに、それが支出される必要品の新しい価値に適合せしめられるようになるであろう。もしも、これらの改良が労働者の消費するすべての物に及ぶならば、これらの商品の交換価値は、その製造についてかかる改良がな

されなかつた或る他の商品に比して、非常に著しい低落を蒙つたに拘らず、またこれらのものは、非常に減少した労働量の生産物であるにも拘らず、労働者は、おそらく、極めて僅かの年數の後においては、彼の享樂品に、もしありとするも、ほんの僅かの附加をなし得たに止つていないにすぎないことを、我々は發見するであろう。」^(註31)ここでスミスのいう労働の眞實価格とリカードオのそれ（詳言すれば「眞實賃銀」）との間に相異を見出す。即ちスミスは労働の眞實価格を支配しうる生活手段の量とみなすことによつてみぎにリカードオのべていると同一の事態よりしてむしろ労働の（客観的）価値の不變性を推論し、リカードオは労働の価値を支配しうる生活手段の価値とみなすことによつてその不變性を否定する。この際、彼は同時に穀物の価値の不變性をも否定する。かくして穀物の価値の變動や労働の価値の變動を否定し、価値の變動を他の一般諸商品に歸するスミス（及びマルサス）に對してリカードオは抗議する。いずれにせよリカードオにとつてはスミスのいわゆる「労働の価値」はもつぱら客観的なものと解されている。蓋し彼はスミスにおける労働の主観的価値及びその不變性の觀念について全く想到せず、これをいささかも問題としていないからである。で彼における「労働の価値」の解釋は極めて一面的であるという外はない。もちろんリカードオの誤解の因は多分にスミスにおける概念の不明確さと混亂とにあるにしても……。

(註29) ベティは価値尺度として成人の平均的日營養 (the days food of an adult Man, at a Medium) をえらび、その理由を純銀の価値と同じくその規則的 (regular) 且つ恒常的 (constant) である點に求めしむ。W. Petty; The Political Anatomy of Ireland. 1672. The Economic Writings of Sir W. Petty. ed. by C. H. Hull. 1839. Vol. I. pp. 181-2
(註31) A. Smith; An Inquiry into the Nature and Causes of the Wealth of Nations. ed. by E. Cannan. I, Vol. p. 33. 大内兵衛氏譯、第一分冊、七二頁。

(註22) Smith; *Ib.* p. 32. 譯、六八頁。

(註23) 主觀的に考えられた労働 (toil and trouble) と「労働の価値」との関係については従来立入った研究がなされていない。リストは「労働の価値」を以て労働と同意義に解している。しかもその場合労働の主体の両義についてならふれていない。5. (Gide et Rist; *Histoire des Doctrines économiques*. 1947. pp. 84-5.) ダーベンポートはスミスの一文、「貨幣または貨物を以て物を買うとき、それは労働をもつて買うのであつて、それは恰も我々が物を獲得するのは自己の肉體の勞役によるのと同じことである。……それには一定量の労働の価値が含まれているので、我々は、……同量の価値を含むと考えられる物と交換するのである。」(p. 32. 譯、六八頁。) を引用して、曰く「さればこれが首尾一貫されるかぎり、その意味するところは、眞實価格あるいは眞實価値は常に獲得するための労働であるということである。しかしこの労働がそれ自身において一種の価値 (a value) として考えられているのかあるかは單に負擔 (burden) として考えられているのかは、さして明確ではない。」(H. J. Davenport; *Value and Distribution*. 1908. pp. 13-4.)

(註24) Smith; *Ib.* p. 35. 譯、七二頁。

(註25) 例えばイングラムは云う。「この文章は嚴密に検討してみると明確に理解されうる意義をもたぬことがわかるのであつて、それは形而上學的思考様式が經濟觀念を不明瞭ならしめるところの一つのよき例を提供している。労働の種類が不定であるの故に『労働の量』とは何であるか。そして『相等しき価値』という言葉は何を意味するか。」(J. K. Ingram; *A History of Political Economy*. 1923. pp. 92-3.)

(註26) 「一方ではA・スミスは……商品の生産において支出された労働の分量による価値の規定を、労働の価値による商品価値の規定と混同し、したがつてまた、労働の相等しい諸量はつねに同じ価値を有するということを證明しようとしている。他方は彼は、労働は、それが諸商品の価値で表示されるかぎりでは労働力の支出としてのみ意義をもつ、ということを感じてはいるが、しかもこの支出をば、再び單に、安樂・自由・および幸福・の犠牲とのみ解して、正常的な生命活動とは解していない。」

もちろん彼は、近代的賃労働者を眼前に見づるのだから。」(Kapital. I. Bd. SS. 51-2. 譯、一九七頁。)[彼「スミス——遊部註」は、諸商品の価値がそれらに含まれている労働時間によつて規定されるということを、それらの価値が労働の価値によつて規定されるということ、絶えず混同して、詳細な説明をする場合にはいつも動搖している。そして彼は、社會的過程が強力的に實行する等しくない諸労働の客觀的平等化をば、個人的諸労働を等しいとする主觀的是認と間違へている。](Kritik. S. 47-8. 譯、六七頁。労働の客觀的平等化に關しては、拙著『價值論争史』第三章第三節、其他參照。

(註27) Smith; *Ib.* p. 35. 譯、七二頁。

(註28) *Ib.* p. 35. 譯、七三頁。

(註29) 「一二時間労働に對し、たとえば六時間の價值生産物、即ち三シリングを受取る労働者の立場に立つてみるならば、彼によつては、實は、彼の一二時間労働は三シリングの購買手段である。彼の労働力の価値が、彼の日常的生活手段の価値の變動によつて三シリングから四シリングに、あるいは三シリングから二シリングに、變動しようとも、また、彼の労働力の価値はもとのままであるのにその價格が、需要供給の關係の變動によつて四シリングに騰貴し又は二シリングに下落しようとも、彼は、つねに一二労働時間と與えるのである。だから、彼の受取る等價の大きさに對する各變動は、彼にとつては必然的に、彼の一二労働時間の價值または價格における變動として現象する。ところがこの事情は、労働日を一つの不變量として取扱うアダム・スミスをして、生活手段の價值が變動し従つて同じ労働日が労働者にとつてより多くの・またはより僅かの・貨幣となつて現われようとも、労働の價值は不變だといふ逆の主張をなすに至らしめた。」(Kapital. I. Bd. SS. 566-7. 譯、一二一四頁。) ここにスミスの見解として示されている労働の不變の價值とはもちろん主觀的價值をさすものである。

労働の眞實價格が變動したのに労働の價值が不變であるというスミスの見解については従来いくつかの批判と解釋とがある。ダーベンポートの見解によれば、ひとが等量の労働を行う場合、その労働の(主觀的)價值は相等しい。しかるに、労働の生産物の量は同一ではありえない。それはあるときはより大であり、あるときはより小である。しかしかく生産物量が變化した場合

リカードオの不變の價值尺度論

に生ずる價值の變化は生産物各個の價值であつて、生産物の總價值ではない。蓋し一定時間にえられる生産物にその時間内の労働の價值がうつされるのであるが、後者は労働時間にして不変なるかぎりいつでも不変であるからである。曰く「市場價值がいはなる困難を呈しよう、スミスは次のことであたかも明白であるかのように理解する。即ち孤立經濟においては、労働の等しい量につねに労働者にとつて等しい價值をもつ、なぜなら労働者の個人差におけるありうべき相異をしばらく別とすれば、『彼はつねに同一量の安樂と自由と幸福とを犠牲とせざるをえない。』からであるといふこと、これである。……「日の生産物の量がいかほどの大きさであれ、總價值は不変であるであろう。變化しなければならぬのは商品諸單位である、というのは『變化するのはそれら商品の價值であつて、それを生産(スミスの原文では購入——遊部註)する労働の價值ではないのである。』から。労働はそれらの商品の眞實價格であり、自らある價值をもつており、この價值を生産物へとうつすのである。」(Davenport; *Ibid.* p. 12.)ここではスミスの労働の價值の主觀的概念がそのまま肯定的にうけとられているが、みぎのスミスの文章は、本来、労働の生産力がいかほど變化しようとも、一定時間にえられる總價值——しかも對象化された投下労働量によつて規制せられる——は不變であり、變化するのは個々の商品の價值であると客觀的に解せられるべき事——拙著『價值と價格』、一〇八、一五三—四頁参照。——の主觀化にほかならない。

キャナンは、この場合、不變と云われている労働の價值があたかも客觀的價值(實質賃銀)であるかの如くに解して次の如く批判している。曰く「この眞實及び名目價格に關する學說の結果は全く獨斷的に世界中で價值の變化しない唯一のものとして労働をえらぶことであつた。……『全く獨斷的に』と私は云うが、それというのも、スミスの云つていふことと反對のことを、即ち、諸商品の價值が變化したのではなくして、むしろより多くの商品がいまや労働と交換に供給されねばならぬので労働の價值が増加したことを云つてはならぬ理由は存しないからである。事實、我々は云う、労働はより一層生産的となつたから『よりよく支拂われる。』と。しかるにスミスは(分配の他の参加者の受領額はこれを措いて問はず)『労働はその生産性がいかようであらうとも、同じ價值を受取つている。』とのべることを要求する。」(E. Cannan; *Ib.* p. 166.)

アモンの見解は、するどくスミスの論理の曖昧さをついてゐる。(我々の解釋は多分にこのアモンの見解とさきのダブンプートの見解とに負う。)曰く「我々は、『金、銀』及び『すべての他の商品』についてと同じように『労働』についてもまた、その價值が變動する、『ある時は安く、ある時は高い、ある時は安い、ある時は高くなる、ある時は高くなる、ある時は高くなる。』と云うのである。もし『價值』がこの意味に解釋されるならば、労働の價值は、商品のそれと全く同じように、變動する。そしてもし價值が他の意味に解釋されるならば、商品の價值は——おおよそ——労働の價值と全く同じように、すべての時と所とにおいて同一であると云う。商品の賣手が支拂う『價格』は、『彼がそれと交換に受取る財貨の量が同様であらうとも、常に同一であらねばならぬ。』(アモン著『正統派經濟學』、二九頁。)更にスミスが雇主にとつては労働の價值が變化したかのように思われ、とのべているのをとらえて云う。「然り、もし『高い』及び『安い』が右のように商品について交換比例の意味に解釋されるならば、それは單にそれを見るのではなくて、事實、そのものである。そして彼が續いて、『併しながら實際は、一の場合に安く他の場合に高いのは財貨である』と云つてゐる時、彼は『高い』『安い』の意味を「の意味から他の意味に變じてゐるのである。」(同、三〇頁。)[「一の意味」から「他の意味」に、——しかし、客觀的價值から主觀的價值に、スミスの労働の價值概念の變化。なおロウルの見解も参照。Erich Roll; *A History of Economic Thought*, 2. Ed. p. 162. スミスの労働の價值の觀念にうつてはじめて比較的妥當な批判をこころみしたのはJ. S. ミルではなからうか? 彼はスミスにおける労働の價值に主客の兩義をみとめ、實質賃銀が變動しているのに労働の價值を不變とみなすスミスの誤謬を指摘している。即ちこの場合、労働の價值を主觀的に解して不變とみなすのは「交換價值なる觀念を全く放棄しこれに代うるに使用價值により類似した全く相異なる觀念を以てするものである。」J. S. Mill; *Principles of Political Economy*, ed. by W. J. Ashley, 1917, p. 567. スミスの不變の價值尺度論のこのは更に *Theorien*, I. Bd. 1923, SS. 186-7. II. Bd. 1. Th. SS. 120-3. 参照。

(註6) Ricardo; *Principles*, p. 10. 譯' 11—11頁。

(註8) *Ib.* pp. 10-11. 譯' 11—11頁。

リカードオの不變の價值尺度論

三

一八二五年、イギリス資本主義は、最初の周期的經濟恐慌を経験した。産業革命によるすさまじい生産力の發達は、スミスの樂天的豫定調和説を裏切つて多くの尖鋭な矛盾を白日のもとにさらしたのであるが、この恐慌はその一頂點であると云つてよからう。もちろんリカードオはその二年前、一八二三年に逝去したから、この恐慌を経験してはいない。しかしこれに先立ついくつかの過渡的性質を有する恐慌、一七九三、一七九七、一八一〇、一八一五、及び一八一九年勃發——はつづさに経験しているのであるから、當時の代表的理論經濟學者としての彼がこれを默過することは許されなかつた。かくして恐慌は國際貿易や、地代や利潤率の問題と同様に彼の價值論の重大な試金石の一つとなつたのであるが、これに對して彼のあたえた解答はすぐれた理論經濟學者としての彼の地位を動搖せしめるに足るものであつた。即ち一般的過剰生産恐慌の否定論と云われるものが、これである。だがこの重大な現實問題との對決における蹉跌はすでにして彼の價值論のうちに用意されていたとみられよう。恐慌はこれを最も抽象的な契機においてとらえれば簡単な商品の流通過程 ($W-G-W$) のうちにその胚因を有していると云える。換言すれば商品の流通過程における販賣 ($W-G$) と購買 ($G-W$) との對立 (「矛盾」統一) 關係こそ資本制經濟の矛盾を最も端初的に表現するものであるからである。がしかし商品の流通過程に示めされる對立關係はそれ自身商品に固有の内在的對立關係の外在化したものであつて、商品内部の使用價值と價值、具體的・有用的勞働と抽象的・人間的勞働、の對立の現象形態にほかならない。かく解してはじめて商品の流通過程の示す對立關係が完全に理解される。換言すれば現實的交換關係が一定の質的及び量的價值關係を基礎とし、前提とすることが理解される。けれどもこのような理解は

ますなによりも價值の形態の理解を必要とする。しかるにリカードオの價值の研究はこれを缺く。それゆゑに彼にとつては商品と貨幣との交換關係がみぎにのべたような意義での價值關係を基礎とし前提とすることが理解されず、したがつてそれは結局原始的物々交換と同一視されてしまう。更にかかる理論的缺陷を助長するものとしてあらわれたものが、ほかならぬ彼の不變の價值尺度論である。蓋し不變の價值尺度論は彼をして貨幣のうちに價值尺度機能を認識することを妨げこれを單なる流通手段 (交換の媒介物) と観するにいたらしめるからである。されば交換價值は交換過程における單なる瞬時的形式的形態にすぎぬとみられ、ひいては貨幣が商品と商品との交換の間に介在することよつてもたらされる資本制經濟固有の矛盾の基本的あらわれ——一般的過剰生産恐慌の形式的・抽象的契機——が逸せられ、それはリカードオによつて、J・ミルやJ・B・セエにおけると同じく否定されることとなる。されば、それ自體として、一見、ささやかな誤謬とみられる不變の價值尺度論は彼の體系崩壞の一因たる役割を擔うものであると云えよう。^(註82)

(註82) いうまでもなく、一般的過剰生産恐慌の否定論の基礎はひとり不變の價值尺度論にあるのみではない。とくに産業資本の循環過程を生産資本の循環 ($P \dots P$) として把握した古典經濟學共通の範式に我々は注目しなければならぬ。(Kapital, II, Bd. SS. 87-88.) なお價值形態論と恐慌論との關聯及びリカードオの批判について、くわしくは、拙著『價值論と史的唯物論』第三章第四節參照。